

Cameron, Michael. 'Figure of Speech and Knowledge of God in Augustine's Early Biblical Interpretation'. *Augustinian Studies*, 38:1 (2007), 61-85.

上村直樹

アウグスティヌスが、386年の回心を経て聖書解釈に取り組みはじめた段階で、解釈の初心者であったことよりも、言葉の技法に熟達した教師であったこと、また、そうした技法を利用したという事実に注目することによって、本論文は、彼が396年にヒッポの司教座を継承する以前、現在の研究状況でも不明瞭な部分が残っている時期のアウグスティヌスが、聖書釈義を実践するにあたってその骨格をいかに形成したかを明らかにしようと試みる。Michael Cameronが手掛かりとするのは、アウグスティヌスが受洗後ほどなくアフリカにもどって著した『創世記についてマニ教徒に対して』における比喩 (trope) の使用例と、その回心直後に構想した自由学芸プログラムの所産である『問答法について』における修辞学の領域でのその理解との連関である。彼が学んだ比喩的な表現法は、その祖型から、聖書テキストについての霊的かつ哲学的な視点と、物的な形象や物語とを媒介するために適用された比喩的な解釈法へどのように拡張されたのか。まず、『創世記についてマニ教徒に対して』における比喩的な解釈法を順次検討する。ついで、『問答法について』にさかのぼって、そうした解釈法の祖型が何であったかを明らかにする。キケロの『弁論家について』、『ヘレンニウス宛修辞学』、クインティリアヌスの『弁論家の教育』を取りあげ、それらと『問答法について』との比較がなされる。